

共感経験の変化を指標とした学部公認心理師候補生による 試行カウンセリングに関する一考察

A Study of Trial Counseling by Undergraduate Licensed Psychologist Candidates
as Outcome-measures of Shifts in Empathic Experiences.

吉見 帆乃花 / 押岡 大覚

聖泉大学人間学部

YOSHIMI, Honoka / OSHIOKA, Daisuke Ph.D.

Seisen University, Faculty of Human Studies

要 約

本研究では、角田（1994）により作成された「共感経験尺度改訂版（以下「EESR」という。）」によって測定される共感経験の変化を、聴き手の成長の指標とした学部公認心理師候補生によるオンライン形式の試行カウンセリングについて、スーパービジョン経験およびスーパービジョンの介入効果の視点から検討することを目的とした。学部公認心理師候補生である筆者を聴き手とした3名による15回の試行カウンセリングを「初期」、「中期」、「後期」の3期に分け、EESRを構成する「共有経験尺度」と「共有不全経験尺度」それぞれについてフリードマン検定を行い、また、「初期－中期」、「中期－後期」、「初期－後期」それぞれの効果量を算出した。その結果、EESRの両下位尺度得点は、スーパービジョンを併用した試行カウンセリングの「初期－後期」において有意に高くなり、また、効果量の視点からは、大きな効果が得られたことを確認した。しかし、本研究は一事例から得られた結果であるため、続報によって更なる検討を試みる必要がある。

キーワード：共感経験 試行カウンセリング 臨床心理士 公認心理師
スーパービジョン フリードマン検定 効果量

1. 問題意識と目的

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により職場や教育の在り方が大きく変化し、オンラインによるコミュニケーションが頻繁に取り入れられるようになった。多くの人々は、昨今の生活様式の変化にともなう状況に対して、いかにして適応していけるのか不安を覚えていることも想像に難くない。

國井 (2021) は、「今回のコロナ禍は世界規模で猛威を振るっており、その規模において過去最悪の事態といえる。このように前例のないコロナ禍によるメンタルヘルスへの影響は、感染に関する不安や経済不安などによる長期ストレス、またソーシャルディスタンスやテレワークが推奨され家族や友人と交流がしにくく逃げ場もない状況が続く中で、広範囲の人々への影響が危惧される。」と述べているように、臨床心理士や公認心理師等による心理支援の需要は高まることが予想される。

心理支援の現場では、民間資格である臨床心理士と国家資格である公認心理師のいずれも“心の専門家”として代表的な資格である。臨床心理士は、(財)日本臨床心理士資格認定協会が定める指定の大学院もしくは専門職大学院を修了することで受験資格を得ることができる。一方、公認心理師の受験資格を満たすためには、いわゆる A 区分では、所定のカリキュラムを備える大学学士課程の卒業および大学院修士課程の修了が必要条件となる。

公認心理師養成課程では学士課程からの実習が求められており、見学を中心とした心理実習のみならず、心理演習やその他の演習科目においても心理支援に関する実践的な訓練を受けることが求められる。そして、心理面接や心理査定に関する技術の向上を促すものとして、上級指導者からの助言や示唆などを受ける「スーパービジョン」が挙げられる。

平木 (2017) は、「スーパービジョンを受けるスーパーバイザーは、自らのパーソナリティーと専門職としての発達を踏まえて自らが担当するケースを振り返り、自分の苦戦や懸念を語り、スーパーバイザーからの指導を受けながら、自らの課題を認識し、その課題の解決に向かうとともに、ケースへのかかわり方の姿勢や取り組みのヒントを得ていく」と述べている。このことから分かるように、スーパービジョンはカウンセラーの心理支援の技術の向上だけでなく、指導者からの客観的な指摘によって、自分自身の問題・課題等に関する気づきを得る上で、カウンセラーの成長には必要不可欠な営みであるといえる。

カウンセリング初学者への教育・訓練に関する先行研究には、葛西・徳永 (2003) が挙げられる。葛西・徳永 (2003) は、試行カウンセリングを通してカウンセラーの適切な自己開示とはどんな条件を満たす自己開示なのか、またその適切な自己開示がもたらす効果

としてクライアントの内面にどのような影響を与えるか、特に、クライアントがカウンセラーに対してどのような感情や印象を持つかということについて検討した。また、上倉・齊藤（2016）は、心理臨床家を目指す初学者を対象とし、面接場面で生じた不安への対応と乗り越え方の経路を示し、初学者の心理臨床家としての成長モデルについて検討している。他にも、田所（2018）は、初学者に対するカウンセラー教育内容に関する欧米諸国の研究を「①専門教育の準備」、「②トレーニング手法」、「③トレーニングの内容とその成果」に分類し、それぞれ概観している。

さて、来談者中心療法の祖である Rogers, C.R. (1957) は、共感の本質を「あたかも…のごとく (*as if* …)」と記述している。心理支援に従事しようとする限り、いわゆる共感のあり方や姿勢を体得しようとすることは必須であると考えられる。特に心理支援初学者に対しては、その第一歩として共感のあり方等に関する教育・訓練を行うことが望ましい。

角田（1994）は、共感を「能動的または創造的に他者の立場に自分を置くことで、自分とは異なる存在である他者の感情を体験すること」と定義し、共感経験のあり方を測定する「共感経験尺度改訂版 (*Empathic Experience Scale Revised*; 以下「EESR」という。)」を作成した。EESR では、共感経験を「共有経験尺度」と「共有不全経験尺度」の2つの下位尺度から捉えようとする。「共有経験尺度」は、相手の感情状態を共有できたことを明確に自覚・認識しているかを測定する尺度である。一方、「共有不全経験尺度」は、相手の感情状態を共有できなかったことを明確に自覚・認識しているかどうかを測定する尺度である。

公認心理師養成課程においてスーパービジョンを併用した心理支援に関する実践的な訓練を受けることが望ましいことは先に述べた。また、コロナ禍にある今、オンラインによって多くの心理支援を受けやすくなった現状を踏まえれば、教育・訓練課程にある公認心理師等候補生は、エンドユーザーからのニーズに対応するべく、対面で行う心理支援とともに、オンライン形式での心理支援にも柔軟に対応できるよう訓練を受ける必要があり、また、その効果に関する研究の蓄積も必要と考える。

以上から、本研究では EESR によって測定される共感経験の変化を、聴き手の成長の指標とした学部公認心理師候補生による試行カウンセリングについて、スーパービジョン経験の視点から検討することを目的とする。

2. 仮説

仮説1：オンライン形式の試行カウンセリングに対する継続的なスーパービジョン経験に

よって、面接の「初期」，「中期」，「後期」と時期を追う毎に聴き手の「共有経験尺度」得点は有意に高くなると予測される。また、「共有経験尺度」に関する効果量は、特に「初期－後期」の間で大きな効果が得られると予測される。

仮説2：オンライン形式の試行カウンセリングに対する継続的なスーパービジョン経験によつて、面接の「初期」，「中期」，「後期」と時期を追う毎に聴き手の「共有不全経験尺度」得点は有意に高くなると予測される。また、「共有不全経験尺度」に関する効果量は、特に「初期－後期」の間で大きな効果が得られると予測される。

3. 方法

3.1 参加者

公認心理師養成を主たる目的とした学士課程の専門演習（ゼミ）に所属する筆者を含めた大学生3名で試行カウンセリングを行った。筆者を含めた3名は、臨床心理士・公認心理師の資格を持ち、また *The International Focusing Institute* 認定 *Focusing Trainer* 資格を持つ指導教員（以下「指導教員」という。）のもと、3年次から週1回90分、対面式での主にフォーカシング指向心理療法に関する面接訓練を受けていた。

3.2 使用尺度

EESRの20項目を用いた。EESRは、「共有経験尺度」10項目と「共有不全経験尺度」10項目から構成されており、それぞれについて「まったく当てはまらない」から「とてもあてはまる」の7件法で回答を行った。

3.3 実施方法

Zoomを用いたオンライン形式の試行カウンセリング（以下「試行カウンセリング」という。）を行った。筆者は「聴き手」となり、他2名は「話し手」，「観察者」の役割をとった。なお、試行カウンセリングを実施した期間は、2022年2月上旬から5月下旬までの期間であった。一回50分の試行カウンセリングを週一回の頻度で実施し、15週連続で行った。面接回数については、厚生労働省（2009）の「うつ病の認知療法・認知行動療法マニュアル」にある認知行動療法の施行頻度等を参考に設定した。

試行カウンセリングの導入は、聴き手である筆者から話し手に対して面接時間は50分間であること、自由に話して欲しいことを伝えた。また、スーパービジョンで使用する資料作成のために、面接経過について録画・録音をすることについての同意を得た。

面接の聴き手である筆者は、指導教員によるフォーカシング指向心理療法に関する面接訓練の経験およびRogers, C.R. (1957) が提唱したカウンセラーが備えるべき三つの態度

条件である「自己一致」, 「無条件の肯定的配慮」, 「共感的理解」を基本姿勢として試行カウンセリングに臨んだ。面接終了後, Zoomをつなげたまま聴き手である筆者はEESRの評定を行った。なお, 聴き手である筆者は, 試行カウンセリング第一セッション前の2月上旬, 指導教員から試行カウンセリングにおける留意点等についてのスーパービジョンを受けた。また, 一回の試行カウンセリング毎に, 次回の面接までの間に指導教員による個別のスーパービジョンを受けた。以上の手続きを15回行った。

3.4 分析方法

15回の試行カウンセリングを5回毎に「初期」, 「中期」, 「後期」に分け, EESRを構成する「共有経験尺度」と「共有不全経験尺度」それぞれについて, スーパービジョンによる介入効果の有無を判断するためにフリードマン検定を行った。また, EESRを構成する「共有経験尺度」および「共有不全経験尺度」の「初期-中期」, 「中期-後期」, 「初期-後期」のそれぞれについて, スーパービジョンによる介入効果の程度を判断するために推定効果量 (*Effect Size Estimate*) を算出した。山田 (2020) および竹林 (2021, 2022) を参照し, 単一事例データに用いることが可能と考えられている効果量の中でも, 頑健性の高さが示されているIRD (*Improvement Rate Difference*; Parker et al., 2009) を用いた。算出した推定効果量IRDの評価には, 表1に示したParker et al. (2011) による判定基準を用いた。なお, フリードマン検定には統計解析ソフト *Social Survey Research Information Co., Ltd., BellCurve for Excel* (ver.4.02) を用いた。また, 推定効果量IRDの算出にはPustejovsky et al. (2022) によってインターネットアプリケーションとして公開されている *Single-case Effect Size Calculator* を用いた。

本研究では, スーパービジョンを併用した試行カウンセリングの1回目から5回目にあたる「初期」の期間を「ベースライン期」と仮定し, 得られた定量的データに対する統計的処理を行った。通常, 単一事例実験計画 (*Single-Case Experimental Design*) や単一事例研究 (*single-case research*) では, 臨床的介入を行う前にベースライン期を設け, 介入後に得られたデータとの比較を行う。これに従えば, 本研究においても試行カウンセリングの「初期」には「聴き手」に対するスーパービジョンを行わず, 「中期」からスーパービジョンを行うことが求められるはずである。しかし, 試行カウンセリングの「初期」から「聴き手」と「話し手」との間では臨床的接触がある以上, 「聴き手」に対するスーパービジョンは必須といえる。以上, 臨床的介入研究における倫理的観点から, 「初期」の期間を「ベースライン期」と仮定した上で, 得られたデータに対する分析を行うこととした。

表1 推定効果量IRDの判断基準

推定効果量	評価基準
$IRD > 0.70$	大きな効果 (<i>large effect</i>)
$0.50 \leq IRD < 0.70$	適度な効果 (<i>moderate effect</i>)
$IRD \leq 0.50$	小さな / 疑わしい効果 (<i>small / questionable effect</i>)

4. 結果

試行カウンセリングにおける「初期」、「中期」、「後期」それぞれの「共有経験尺度」および「共有不全経験尺度」の記述統計量を以下、表2に示した。また、フリードマン検定の結果（表3）と推定効果量IRDの結果（表4）を以下に示した。

表2 記述統計量

下位尺度	初期		中期		後期	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
共有経験尺度	4.00	0.71	4.54	0.42	5.16	0.45
共有不全経験尺度	2.48	0.54	3.88	0.62	5.88	0.54

表3 フリードマン検定の結果

下位尺度	初期-中期		中期-後期		初期-後期	
	差	<i>p</i> 値	差	<i>p</i> 値	差	<i>p</i> 値
共有経験尺度	0.54	0.82	0.62	0.19	1.16	< 0.05 *
共有不全経験尺度	1.40	0.39	2.00	0.39	3.40	< 0.01 **

表4 推定効果量IRDの結果

下位尺度	初期－中期		中期－後期		初期－後期	
	IRD	判定	IRD	判定	IRD	判定
共有経験尺度	0.40	小さな効果 疑わしい効果	0.60	適度な効果	0.80	大きな効果
共有不全経験尺度	0.80	大きな効果	0.90	大きな効果	1.00	大きな効果

本研究の仮説1では、オンライン形式の試行カウンセリングに対する継続的なスーパービジョン経験によって、面接の「初期」、「中期」、「後期」と時期を追う毎に聴き手の「共有経験尺度」得点は有意に高くなると予測した。また、「共有経験尺度」に関する効果量は、特に「初期－後期」の間で大きな効果が得られると予測した。

「共有経験尺度」について、測定時期（「初期」「中期」「後期」）を独立変数としてフリードマン検定を行った結果、「初期－中期」での有意差は認められず ($p < .82$)、また「中期－後期」での有意差も認められなかった ($p < .19$)。しかし、「初期－後期」では5%水準で有意差が認められた ($p > .02$)。一方、「共有経験尺度」の「初期－中期」についての推定効果量IRDを算出した結果、小さな／疑わしい効果が確認された ($IRD = .40$)。また、「共有経験尺度」の「中期－後期」についての推定効果量IRDを算出した結果、適度な効果が確認された ($IRD = .60$)。さらに、「共有経験尺度」の「初期－後期」についての推定効果量IRDを算出した結果、大きな効果が確認された ($IRD = .80$)。以上から、仮説1の一部が支持された。

次に、本研究の仮説2では、オンライン形式の試行カウンセリングに対する継続的なスーパービジョン経験によって、面接の「初期」、「中期」、「後期」と時期を追う毎に聴き手の「共有不全経験尺度」得点は有意に高くなると予測した。また、「共有不全経験尺度」に関する効果量は、特に「初期－後期」の間で大きな効果が得られると予測した。

「共有不全経験尺度」について、測定時期（「初期」「中期」「後期」）を独立変数としてフリードマン検定を行った結果、「初期－中期」での有意差は認められず ($p < .39$)、また「中期－後期」での有意差も認められなかった ($p < .39$)。しかし、「初期－後期」では1%水準で有意差が認められた ($p > .01$)。一方、「共有不全経験尺度」の「初期－中期」についての推定効果量IRDを算出した結果、大きな効果が確認された ($IRD = .80$)。また、「共有不全経験尺度」の「中期－後期」についての推定効果量IRDを算出した結果、

大きな効果が確認された ($IRD = .90$) さらに、「共有不全経験尺度」の「初期-後期」についての推定効果量 IRD を算出した結果、大きな効果が確認された ($IRD = 1.00$)。以上から、仮説2の一部が支持された。

5. 考察

本研究では、EESR によって測定される共感経験の変化を、聴き手としての成長の指標とした学部公認心理師候補生による試行カウンセリングについて、スーパービジョン経験の視点から検討することを目的とした。EESR を構成する「共有経験尺度」および「共有不全経験尺度」の両下位尺度得点は、スーパービジョンを併用した試行カウンセリングの「初期-後期」において、それぞれ有意に高くなることが確認された。

ここからは仮説1にある「共有経験尺度」について、主に「初期-後期」に関する効果量の結果をもとに、スーパービジョン経験の視点から考察する。

「初期」のスーパービジョンは、聴き手としての課題を指導教員に突きつけられているかのような感覚に陥り、また、その課題一つ一つについて、聴き手自身が府に落ちた感覚を持つことが難しかった時期であった。例えば、話し手が使った言葉を伝え返すこと (*reflection*; Rogers, 1942) の必要性についての助言があった。また、話し手の語りに表示される感情に関するフレーズについてはその時に取った行動を尋ねたり、行動に関する語りがあった際にはその時の気持ちを尋ねたりすることも大切であるという助言もあった。この他にも心理面接における勘所について多くのことをスーパービジョンのなかで指摘されたが、「初期」のスーパービジョン経験は、結果として聴き手である筆者の混乱に繋がっていた。

「初期」の筆者は、気負いもあり、3年生の一年間を費やした指導教員によるフォーカシング指向心理療法に関する面接訓練の経験や、Rogers (1957) による三つの態度条件(「自己一致」, 「無条件の肯定的配慮」, 「共感的理解」) を基本姿勢として試行カウンセリングに臨むことができていなかった。具体的には、話し手を導いたり、答えを出してあげたり、アドバイスをしたりすることによって話し手の感情状態を把握・共有できるものとあると誤った理解や認識をしていた。「初期」の面接のなかでは、話し手の語りの何に対して応答したら良いのか理解不十分の状態にあり、結果的に、聴き手は話し手の言葉を漫然と機械的に繰り返すだけになってしまっていた。

スーパービジョンにおいては、指導教員から「応答の際には、とにかく相手(話し手)が使った言葉のみを用いること。」という助言が繰り返された。しかし、聴き手である筆者

は、話し手の言葉を繰り返すだけでは話し手の役に立てないという思い込みがあったり、面接そのものに手応えを感じられない状態にあった。さらに「初期」の筆者は、指導教員に分かってもらえない、認めてもらえないといった類いの感覚を強く抱き、指導教員からのスーパービジョンを受けることに対して拒否的になっていたことも否定はできない。以上が、話し手の感情状態を共有できたという感覚を持たずにいた要因と考えられる。

しかし、「中期」を経て「後期」に入ると、面接およびスーパービジョンの経験を積む毎に筆者のスーパービジョンに対する受け身的・拒否的な姿勢が、積極的・肯定的な姿勢に変化していった。「初期」の段階ではスーパービジョンを受けることが面接時の筆者の迷いの原因となったり自信をなくしたりする要因であったが、「後期」に入るにつれて、聴き手たる筆者には、徐々にではあるが自己省察の姿勢や面接時の創意工夫が表れ、また、そのあり方がスーパービジョンにおいても支持されるようになった。この変化によって、聴き手には話し手の感情が“共有できた感覚”が芽生えてきたと推察される。「初期」の頃の筆者は、聴き手の役割について誤った認識をしていたが、スーパービジョン経験を積む中で、聴き手と話し手の間で感情が共有されるということはどういうことなのか、特に、他者の感情を完全には理解することは難しいが、理解・共有しようとする態度をもつことの必要性を理解し始めたことが、「後期」のスーパービジョンにおける重要な経験であると指摘できる。

井出ら(2015)は、大学院におけるスーパービジョンでのよかった体験に関する研究から「客観的な視点・意見をもらえた」、「自分では見えていなかった点に気づいた」ことを明らかにしている。本研究においても、スーパービジョンのなかで指導教員から客観的な視点による助言・指導があった。この経験によって筆者にはより適切な“共有できた感覚”が醸成され、その結果が「共有経験尺度」の「初期-後期」における効果量の大きな効果につながったと考えられる。

ここからは仮説2にある「共有不全経験尺度」について、主に「初期-後期」に関する効果量の結果をもとに、スーパービジョン経験の視点から考察する。

「初期」のスーパービジョンでは、先にも述べたように筆者は聴き手の果たす役割を誤解しており、また、話し手の感情を把握・共有できたつもりになっていた。聴き手である筆者は、Rogers(1957)が述べる共感の本質である「あたかも…のごとく(*as if*…)」を誤って理解し、話し手の語りの世界に入り込む必要があるという姿勢で面接に臨んできた。話し手の世界観を理解しようとするあまり、思い込みに頼り、自分自身の理解の枠組みに

当てはめる傾向があった。これは、角田（1997）が示す同情に近い共感がなされていたことが考えられる。

指導教員からは、資料から読み取り可能な、筆者が把握できていない感情や共有できていない感情の存在に関する指摘もあったが、「初期」の頃の筆者は、その経験には開かれていなかった。スーパービジョンの中では、筆者が感じた話し手の感情とは異なる、話し手の別の感情に関する理解が指導教員から示されることがしばしばあった。面接経過の資料は、指導教員と同一のものを使用しているにも関わらず、筆者とは異なる視点、理解が示されたことで、聴き手である筆者が気づけていない感情の存在が明らかとなったり、異なる理解の視点が指導教員から示されたのである。

「後期」のスーパービジョンに入っても、「初期」の頃から指摘されていた面接時の“わからない”という感覚を大切にすることに焦点を当てたコメントが指導教員から伝えられた。“わからない”という感覚を重んじるスーパービジョンの継続経験は、「初期」の頃の誤った、あるいは偏った筆者の構えを徐々に軟化させた。筆者は「後期」にかけてより適切な“わからない”という感覚に開かれ始め、また、“共有できた感覚”のみを頼りにした「初期」の頃の面接から、「後期」にかけての“共有できない感覚もある”ことへの気づきが生まれた。聴き手は話し手とは異なる他者であるという前提を保持し、だからこそ“わからない”という感覚を保ちながら話し手に接するという共有不全経験に開かれたことが、「共有不全経験尺度」の「初期－後期」における効果量の大きな効果につながったと考えられる。

6. まとめと課題

本研究ではEESRによって測定される共感経験の変化を、聴き手としての成長の指標とした学部公認心理師候補生による試行カウンセリングについて、スーパービジョン経験の視点から検討することを目的とした。「共有経験尺度」および「共有不全経験尺度」の両下位尺度得点は、スーパービジョンの併用によって試行カウンセリングの「初期－後期」において有意に高くなり、また、大きな効果が得られることを確認した。しかし、本研究は一事例によるものであるため、続報によって更なる検討を試みる必要があると考える。

附言

本研究は、聖泉大学人間学部にも所属する第一著者である吉見帆乃花の卒業論文を元に、指導教員である第二著者の押岡大覚が加除修正を施したものである。指導教員としては、可能な限り第一著者である吉見の記述・論考を活かすことに努めた。しかし、“学士課程から

の公認心理師等心理専門職者養成プロジェクト”のもと、約2年間にわたりゼミ全体で取り組んだ研究であるという性質から、本号所収の別稿【北川・押岡 (2023) および若狭・押岡 (2023)】との重複表現が散見される。ご容赦いただきたい。一方、論旨等不十分な箇所があることも否めない。ひとえに指導教員としての力不足によるものである。ご助言、ご批判をお寄せいただければ幸いである。なお、本研究は、聖泉大学人間学部卒業研究に係る倫理審査において承認を受けた上で行われた。

参考文献・引用文献

- 平木 典子 (2017) . 増補改訂心理臨床スーパーヴィジョン—学派を超えた統合モデル 金剛出版.
- 井出 尚子・田淵 尚子・箕浦 亜子・上村 恭子・小海 富美代・須佐 祐子 (2015) . 心理臨床家の専門家としての発達に関する研究 (3) ~大学院における心理臨床教育としてのスーパーヴィジョンに求められること—スーパーヴィジョンでのよかった体験の質的分析より— 明星大学心理相談センター研究紀要 9, 1-13.
- 角田 豊 (1991) . 共感経験尺度の作成 京都大学教育学部紀要 37, 248-258.
- 角田 豊 (1994) . 共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み 教育心理学研究 42, 193-200.
- 葛西 真記子・徳永 啓牟 (2003) . カウンセラーの「適切な自己開示」に関する研究—試行カウンセリングを通して— 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編) 18, 67-75.
- 國井 泰人 (2021) . コロナ禍における人・社会・環境—危機への対応と持続可能な社会の実現— 学術の動向 26(11), 40-46.
- 厚生労働省 (2009) . うつ病の認知療法・認知行動療法マニュアル (平成 21 年度厚生労働省こころの健康科学研究事業「精神療法の実施方法と有効性に関する研究」) <https://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/kokoro/dl/01.pdf> (2022年12月20日)
- Parker, R.I., & Vannest, K.J. (2009) . An Improved Effect Size for Single-Case Research: Nonoverlap of All Pairs. *Behavior Therapy*, 40, 357-367.
- Parker, R.I., Vannest, K.J., & Davis, J.L. (2011) . Effect size in single-case research: A review of nine nonoverlap techniques. *Behavior Modification*, 35(4), 303-322.
- Pustejovsky, J.E., Chen, M., & Swan, D.M. (2022) . Single-case effect size calculator (Version 0.6.1) [Web application]. <https://jepusto.shinyapps.io/SCD-effect-sizes>.
- Rogers, C.R. (1942) . *Counseling and Psychotherapy: Newer Concepts in Practice*.

Boston: Houghton Mifflin.

Rogers, C.R. (1951) . *Client-centered therapy: Its current practice, implications, and theory*. Houghton Mifflin.

Rogers, C.R. (1957) . The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Counseling Psychology*. 21, 95-103.

竹林 由武 (2021) . シングルケース実験デザインにおける介入効果の評価 心身医学 61(8), 708-714.

竹林 由武 (2022) . 認知行動療法研究シングルケース実験デザインにおける介入の有効性評価 認知行動療法研究 48(2), 145-154.

田所 摂寿 (2018) . 初学者へのカウンセラー教育に関する研究の展望—日本における実証的研究に向けて— カウンセリング研究 51, 51-62.

上倉 安代・齊藤 翔悟・佐藤 真理奈・野村 規雄・入軽井 悦子 (2016) . 心理面接における初学者の不安への対処と乗り越え方および成長—複線径路・等至性モデル (TEM) による分析— 立正大学臨床心理学研究 14, 41-54.

山田 剛史 (2020) . 単一事例データのための統計的方法について—効果量を中心に— 高齢者のケアと行動科学 25, 35-55.